

わたしのSPの鉄壁♥恋愛警護

目次

わたしのSPの鉄壁♥恋愛警護

5

番外編 戦士の後悔

243

わたしのSPの鉄壁♥恋愛警護

予感があつた、なんて非科学的なことは言わない。だってわたしはリアリストだから。前触れとか悪い予感とか、そういったものを感じたことはこれまで皆無だ。

その日はいつも通りの時間に家を出て、いつもと同じ電車に乗った。いつもの場所、いつもの駅、いつもの道を通って会社に向かう。

けれど、唯一いつもと違ったのは、見るからに怪しい人物が目の前にいたこと。

深く帽子をかぶっているから顔は見えない。その上、もう春も盛りなのに、厚手のロングコートを着ている。

まわりには通勤中の人たちがたくさんいて、そのほとんどがすぐ前にある巨大なビル——芳野総合警備保障の本社ビルを指している。もちろん、わたしもその中の一人だ。

そんな中、その怪しい人物は、わたしの少し前にいて、人の流れに逆らいつつすぐに目の前の女の人に向かっていた。

わたしは歩くスピードを少しずつ落とし、男を見つめる。

帽子の隙間から見える目は、一見なにも見ていないようできて、その実、強い悪意を感じさせた。

不審者決定でしょ。

わたしは、肩にかけていた大きめのトートバッグに右手を入れ、目当てのものを探して握る。男が女性との距離を詰め、その間は五メートルを切った。

三、二、一……

心の中でカウントダウンを始めた時、目の端に人影を捉えた。同じような風貌の男がもう一人、こちらに向かってくるのが見える。

二人なんて聞いてないってば！

目の前の男と女性の距離はもう目と鼻の先だ。どうしようかと焦っていると、また新たに黒いスーツの男が一人駆け寄ってくる。

いや、三人はまじで無理だつて。

なんて思ったその時、黒いスーツの男が目前の男に飛びかかって、一瞬で地面に引き倒した。大きな音が響きわたり、まわりから悲鳴が上がる。

ホツとしたのも束の間。もう一人の男がそのままのスピードで、わたしに向かってきた。とっさに振り向き、トートバッグから取り出したものの照準を合わせる。

男がわたしのほうへ手を伸ばした瞬間、右手から「ボンッ！」という音とともに、細い網が飛び出す。それは投網みたいに男の体を包み、驚いたその男はそのまま後ろにひっくり返った。

まわりからまた悲鳴が聞こえ、それと同時に、おおーという声とまばらな拍手の音がする。

わたしは右手に握ったピストル型の装置から出ている白い煙をふつと息で払い、まだ網の中でも

がいている男を見下ろした。

「このわたしに襲いかかってくるなんて、勉強不足もいいところよ」

男が苦々しい表情でこちらを見上げた。網が体中に絡まって取れないようだ。

それもそのはず、この網は特殊な糸で編まれている。

蜘蛛の糸をヒントに作られたその素材は、粘着性があり一度くつつくと特殊な洗浄液をかけない限り取れないようになっていた。

開発したのは、芳野総合警備保障、企画開発室商品開発部、課長である、わたし——桃井志乃、三十歳だ。

まだ試作段階のこの網、汎用性はないが、この危機を回避できたのだから実用性はまあまあありそうだ。これでデータも取れるかもしれない。

もう一人の男のほうを見ると、黒いスーツ姿の男に取り押さえられていた。

どうやら味方だったスーツの彼は、がっちりとした体格で、かなり鍛えていることが服の上からでもよくわかる。

その正義のヒーローにお礼を言おうと、わたしは声をかけた。

「あの……」

彼が振り返る。

「……あら」

その顔を見て、わたしは口をぽかんと開けてしまった。

芸能人張りのやたらと整った顔は、目つきが鋭く、口は不機嫌そうに閉じられている。その顔に見覚えがあった。

彼は——

「大丈夫か？」

彼の口から出た声はやけに低くて、やっぱり不機嫌そうだ。

わたしが黙ったまま頷いたその時、ビルの中から騒ぎを聞きつけた大勢の警備員が走り出てきた。あつという間にまわりを囲まれる。

網に絡まった男を取り押さえようとした警備員に、わたしは慌てて声をかけた。

「待って。そのまま触らないで。あなたもくつついちゃいます。なにか、シーツみたいなもので包んでください。あとで洗浄液を持っていけます」

警備員は頷き、誰かに無線で連絡した。

「桃井さん！」

突然、声をかけられ顔を上げる。騒然としている群衆をかき分けてやってきたのは、社長の側近の一人だ。

彼はまだ倒れている男を一瞥し、わたしに顔を向けた。

「桃井さん、お怪我は？」

「いいえ、なにも。大丈夫です」

「良かった。社長からお話があります。ご同行ください」

「今？でもすぐに洗淨液を届けなければ、あの網の扱いに困るし、それに警察にも……」
「それはこちらで対応します」

彼がそう言うと、大きなビニールシートを抱えた屈強な男性らが走ってくる。そして、そのまま男を包んで運んでいった。

まだその場で騒然としている他の社員たちも、警備員に誘導されて少しずつ移動を始める。

「桃井さん」

「あ、はい」

社長の側近に促されたわたしも、歩き出す。急いであたりを見回したけど、さっきの黒いスーツの彼は、どこにも見えない。お礼を言いそびれてしまった……

後悔しているうちに、どこからか現れた別の黒いスーツ姿の男たちに囲まれる。どうやらこの会社の警護課の人のようだ。

なんだか大仰な様子に胸がざわつく。

なにがあつたの？ いや、通り魔にはさつき遭つたけど。

わたしを中心に異様な集団が出来上がった。人がわたしたちを避け、道が開かれる。なんだか、ものすごいVIPになつた気分だ。

確かに、防犯グッズの開発でかなりの利益を会社にもたらしている自覚はある。

わたしは、昔から発明に興味があつたし、物を作るのが得意だ。防犯装置全般を特に勉強して、業界最大手のこの会社に入れたことも運が良いのだろう。

その運の良さのまま、商品開発部に配属され、以来、防犯装置やグッズの開発に勤しみ、才能をしっかりと開花させた。大きな企画開発にも携わり、特許をいくつか持っている。

今では「芳野のマッドサイエンティスト」なんて、嬉しくもない異名もついているのだ。けれど、開発以外のことに關しては、褒められるものはあまりない。

容姿は普通。さらには、開発に夢中になりすぎて世の中のことちよつと疎い。

ため息をついたわたしは、社長専用のエレベーターに乗せられた。扉みたいな男たちに囲まれ、なんだか息苦しい。

最上階で扉が開くと、そこにはまた別のボディガードが控えていた。

その先に進むのは社長の側近とわたしだけで、大勢のボディガードはその場にとどまる。

わたしは広い廊下を歩き、大きな扉の前で立ち止まった。手をかける前に、扉は内側から開く。その扉の真正面の大きな机に、社長が座っていた。

ラスボス感がするな。

そんな心の声を隠しながら、側近と一緒に中に入る。

スイス人の血を引く芳野社長は、日本人離した容姿で、威圧感がすごい。その経営手腕は誰もが認めるところで、彼が社長に就任して以来、会社の業績はうなぎのぼりだ。

「大丈夫か？」

社長が低い声でわたしに聞いた。

「なにが？」と一瞬思つたけれど、すぐにさっきのことだと気がつく。

「はい。通り魔なんてびつくりしましたけど、おかげで新しい防犯グッズの実践データが取れそうです」

そう笑顔で答えたのに、社長の表情は厳しい。そしてよく見ると、そばに控えている四人の側近も、みんな神妙な顔をしていた。

「なんだか、わたし一人だけテンションが緩いようだ。」

確かに会社の前で通り魔に襲われるなんて、新聞沙汰だ。会社としてはありがたいのかもしれない。

そう頭の中で考えていると、社長がじつとこちらを見つめてきた。わたしは、慌てて居住まいを直す。

「最近はどうかな？ 開発は進んでいるか？」

「ん？ 急に仕事の話になった？」

「はい。今は女性用の携帯防犯グッズをあれこれ試作中ですが、順調です」

「そうか。では、待遇についてはどうだろう？ 例えば報酬に不満は？」

「……別に、なにもありませんけど。仕事は好き勝手にやらせてもらえて大満足ですし、お給料も過分にいただいていると思っています」

給料制だけど、開発の成功報酬はボーナスとしてきっちりともらっている。

「他の会社に移ろうと思ったことは？」

「いえ、考えたことはありません」

社長はさつきからいったいなんの話をしているのか？ 頭の中は疑問符だらけだ。

困惑気味のわたしに対し、社長はようやくホッとした顔になった。それでも厳しい表情を崩さず、わたしをジッと見据える。

「率直に言おう。きみは狙われている。いや、きみ自身というか、恐らくきみが持っている特許権だろうがな」

「……は？ え？ 誰に？」

あまりにも突飛な発言に、わたしは思わず敬語を忘れた。

「誰というより、企業にというほうが正しい。きみはある企業から狙われている」

「は？」

「自分がどれほど利益を生む開発をしてきたか、自覚はないのか？ 去年きみが作った顔認証システムは、今や市場のほとんどを占めている」

「いや、知っていますけど……」

「きみの開発に関わる特許権は、うちの会社が保有しているものもあるが、いくつかはきみ個人が所有している。その特許権をきみが他の企業に譲渡した場合、その企業は多額の使用料を受け取ることができる」

「……はあ」

「その利益を欲しがる企業があってもおかしくはないだろう。きみがもし、我が社に不満を持っている、それが少しでも外部に洩れれば、あつという間に他社から引き抜きがかかるはずだ。だが、

我々としては、きみの才能を手放すつもりはない。きみにとってより良い環境を維持できるよう努めるつもりだ」

「はあ……」

「だが、今我々が掴んでいるその企業は、正攻法を取らないらしい」

「とおっしゃいますと？」

「過去の事例から考えられる最悪のパターンは、拉致監禁の末の強制労働」

「ひいつ」

思いもよらない恐怖ワードに身がすくむ。

「一番よく使われる手は脅迫だ」

「きよ、脅迫!?」

社長が難しい顔をしたまま頷いた。

「ターゲットの弱みを握る。相手にその隙がない場合は、あえて罠をしかけて弱みを作る。それを元に脅迫をして……。まあその先はわかるだろう」

いやいや、わかりたくないですけどっ。

「つまり、きみは現在そういう組織に狙われている」

社長はわたしにビシツと言いつつ放った。まわりに控えている側近の皆さんも、真剣な顔だ。

「じゃ、じゃあ、もしかして今朝の人も？」

あんなのが次から次に現れるのは怖すぎる。わたしが尋ねると、社長はちらりと側近の一人を

見た。

「可能性はありますが、やつらは公衆の面前で警察沙汰になる可能性があることを滅多にやりません。実情はどうあれ、本人が自主的に転職した事になっています。これまでは」

なるほど、脅迫の末の自主退職ってことか。

「じゃあ今朝の人は？」

「まだわかりませんが、おそらく別件でしょうね。彼らは武器らしいものはなにも持っていません。たそうですし、こちらの過剰防衛で終わりそうです」

社長に代わって側近が答える。

「——ということで、きみにボディガードをつけることにした」

「はい？」

社長の言葉がうまく呑み込めなくて、またまぬけな声を出してしまった。

「ボディガードだ」

「……ボディガードって。直接的な攻撃がないなら、要らないんじゃないですか？ たとえ今日みたいなのがあっても、自分の身は自分で守れますし」

ただし相手が一人だけなら……:だけだ。

「相手の動きを正確に掴めるまでは、念には念を入れたい」

社長はわたしの言葉を一蹴して、どこかに向かって手を振る。すると、後ろのドアが開く音がして、黒いスーツ姿の男女が部屋に入ってきた。

でかい。

女性のほうも背が高いけど、男性のほうがとにかく高身長だ。

彼の顔を見たわたしは、一瞬間が止まった気がした。

「紹介しよう。警備部警護課所属の——」

「あっ！」

社長の言葉に重ねて、わたしは声を上げる。

「知り合いか？」

「いえ。さっきもお会いしたので……」

そこにいたのは、さっき助けに入ってくれた黒スーツの男だ。

おもむろに彼は口を開く。

「同期です。新人の頃から、この人には酷い目に遭わされています」

そう言って、わたしのほうを見た。

なんか腹が立つ視線だわ。

「ちよっと。人聞きの悪いこと言わないでよ。あれらは事故でしょ」

「俺は毎回、死にかけたがな」

「防犯用の武器を当てたのは悪かったわよ。でも、あの時にもちゃんと謝ったでしょう。いつまで

も昔のことをうるさいんだから……」

「なんだと」

彼が一步近づいてきた。

身長百五十五センチのわたしと比べ、彼は百八十センチ以上ありそうだ。

でも、そんな見下ろされるように睨まれたって、怖くないもんね。

負けじとじつと睨み返していると、ゴホンツと咳払いが聞こえた。慌てて振り返ると、社長が面

白そうな顔でこちらを見ている。

「随分と仲が良さそうだな」

「まさか！」

「違います」

思わず声が揃ってしまい、彼がまた苦い顔をした。

この男は、同期の柚木駿だ。

芳野総合警備保障の警備部警護課所属で、芸能人張りのイケメン。少しぶっきらぼうなところがわたしはどうかと思うが、女性人気は高いそうだ。

初めて柚木を見た時は、わたしも素敵な人だなーと思った。若気の至りというやつだけだ。

ただ彼とは、なにかと間が悪い。

彼がいると、なぜかわたしは失敗する。

そもそものきっかけは、新入社員歓迎会だ。

新入社員が一堂に会し親交を深めるその会では、自己紹介としてそれぞれが得意なことを披露することになっていた。

念願の警備会社の企画開発室に所属が決まったわたしは、意気揚々と、学生時代に開発した防犯グッズの試作品を発表したのだ。

そして、小型のカラーボールを発射できるハンドガン型のそれを的に向かって発射した瞬間、離れたところで見ていた柚木の顔を掠めた。カラーボールは破裂せず、彼の後ろの壁にめり込む。会場は一瞬シーンとなり、それから様々な悲鳴や叫び声が溢れ、阿鼻叫喚の嵐になった。

「お前！ 危ないだろうっ!!」

わたしは頬にうつすらと血を滲ませた柚木に詰め寄られた。

「ごめんなさい！ 大丈夫ですか？ おかしいな。練習ではうまくいったのに。わたし、射撃には自信があるんです」

「そういう問題か!？」

「本当にごめんなさい」

何度も謝ったけど柚木の怒りは収まらず、会も急遽中止になった。彼は治療のために病院へ連れていかれ、この事故がきっかけかどうかはわからないものの、翌年以降、この新入社員歓迎会はなくなった。

そして、彼との因縁はその後も続く。

たとえば、社内で警報器の実験中、偶然居合わせた彼に防犯ブザーの大音量を聞かせてしまったとか、たまたま彼が通りかかる前にまきびしをばらまいてしまうとか、そんなこと。

そのたびに彼からはすごい剣幕で怒られ、こっちだってうんざりしている。

普段、こんな失敗はしないのに、柚木がそばにいる時に限って迷惑をかけてしまうのはなぜなのか、わたしにだって謎だ。

だが、開発に失敗はつきもの。失敗なくして成功はない。

「――ならば、自己紹介の必要もないかと思うが、一応言っておく。警護課の柚木と安藤だ。当分の間、この二人にきみの身を守ってもらうことにした」

わたしの長い回想をぶった切るように社長が言った。柚木の隣にいる女性が一步前に出る。

「安藤楓です。初めまして」

すらりと背が高く美人な彼女は、まるで見下すみたいにわたしを見た。なんだか、ものすごく嫌そう。

柚木も彼女もこの配置に不満があるようだ。もちろんわたしも。

「社長、他の人にしてくださいませんか？」

「悪いが、彼ら以上の人材がいなくてね。特に柚木は凄腕だと評判だ」
わたしの願いはあっさりと却下された。

「じゃあ、絶対に研究の邪魔をしない、協力すると約束してください」

そう言うと、社長は一瞬、柚木たちを見て頷く。

「約束させよう。では、頼んだぞ」

社長が改めて二人を見た。まるで反論は認めないとばかりの怖い目だ。その瞬間、二人の表情が変わった。

ああ、プロなのね。

びしっと背筋を伸ばして社長からの指令を聞く彼らを見ながら、わたしはこっそりため息をついた。

ただ毎日楽しく開発をしていただけなのに、こんなことになるとは……

誰とも知らない相手から狙われるのと、自分を嫌っている人間と四六時中一緒にいること。果たしてどちらがましなのか、今はまだ答えが出なかった。

2

怒濤の展開についていけないまま、不審者の体に貼りついた特殊な網を外すことで一日が終わった。

その間も柚木はわたしと一緒にいて、呆れた顔をしていただけだ。

結局、彼らがわたしのボディガードとして正式に動き出したのは、翌日からだった。

翌朝。わたしは出社し、まず商品開発部に顔を出す。

「桃井さん、おはようございます。昨日は大活躍でしたね。大丈夫でしたか？」

「おはようございます。ええ、大丈夫よ」

「通り魔を撃退したって、すごいじゃないですか！」

「あのまさかの投網型銃の実用性が証明されましたね！」

「ええ、そうね」

まさかつてなによ、と思いつつ、奥へ進み、自分のデスクに向かう。

「桃井くん、おはよう」

隣の席に座っていた、年配の男性が顔を上げた。

「部長、おはようございます」

彼はわたしの上司だ。

「昨日は大変だったね。社長からボディガードの件も聞いたよ。こちらも用心するが、きみも十分注意するように」

「はい」

「彼は、もうきみのラボにいるよ」

「あー。はい……」

なんだか気が重い。

わたしはデスクの上にある書類を一通りチェックして、ファイルにまとめた。商品開発部のフロアには週に一、二度しか立ち寄らない。ほとんどの日は自分の研究室に直行している。

「ではしばらく籠りますので、なにかあったら内線お願いします」

そう部長に伝え、わたしは荷物を持って入り口とは反対側のドアを出た。

その先は、長い廊下が続いている。片側に洗面所と給湯室があり、さらにその奥を曲がるとエレ

ペーターと非常階段がある。

エレペーターで地下二階まで下り、目の前のドアに手をかけた。

「——うへーっ、どえらいイケメンですね！」

中からすつとんきような声が聞こえる。

十五畳ほどの広さのその部屋は、「商品開発部、課長室」——通称ラボと呼ばれていた。開発用のコンピュータと作業机で、そのほとんどが埋まっている。

そんな部屋の真ん中で、わたしの助手の河合かわいさくらが柚木の顔を見上げていた。そして、やおら自分のスマホを取り出し、写真を撮ろうとしたところで彼に遮さかられる。

「申し訳ないが、写真は厳禁だ」

「ええー、SNSにあげたりしませんよ。個人で楽しむだけなのにー」

さくらが残念そうな声を出す。

「写真くらい撮らせてあげたら？」

わたしがそう言いながら近づくと、柚木が振り返って苦い表情を浮かべた。

「あ、カチョー！ おはようございます。カチョーのボディガード、超イケメンじゃないですかっ！」

さくらの楽しそうな表情を見て、わたしは彼と同じような苦い顔になる。

わたしより五つ年下の彼女は、優秀な助手だが若干ミィハーなどところがあるのだ。

「おはよう、さくらちゃん。事情はもう聞いている？」

作業台の上に荷物を置き、あえて柚木を見ないようにしてさくらに声をかけた。

「あ、はい。先ほど社長秘書の乃木のぎさんが来て、一通り説明してくれました」

「そう。まあ、そういうことになったから、しばらくよろしくね」

「はい。それにしてもカチョーも大変ですねえ。変な組織に狙われるなんて」

「まったく困ったものよね。でもこんな時こそ通常営業。前回の続きをやりましょ」

「了解！ では準備してきますね」

さくらが頷うなづいて別室に消えた。それを見送って、今日初めて柚木に向き合う。

「その怖い顔はなんとかならないの？ 朝から気分がだだ下がりよ」

「悪いが、これが地顔だ」

彼は面白くなさそうな顔、というより真面目な顔のままだ。

笑えばもつと素敵なのに……なんて、絶対口にしなない。

「わたしのことが嫌いなら、他の人に代われないの？」

「嫌いだと思ったことはないし、他のやつにこの任務を任せるつもりもない」

「え……!? そうなんだ」

意外な彼の言葉に、わたしは驚く。

嫌じゃないんだ。

柚木はわたしに対して怒っていたし、ずっと避けられていると感じていたのに……

だったらもつと楽しそうにしてくれてもいいじゃない、とは思うけど、そこまで望むのは贅ぜいたく沢だ。

わたしは荷物を片づけて自分のパソコンを立ち上げ、まずメールをチェックした。急ぎのものにはすぐ返信をして、フォルダに振り分けていく。

今日必要な資料を揃えながら、手持ち無沙汰のように立っている柚木を見た。目つきは鋭く、短く切った髪がその精悍な顔立ちをさらに引き立てている。黒いスーツをピシッと着こなし、耳には小さなインカムをつけていた。

悔しいけど、かつこいしいし絵になる。さくらが思わず写真を撮りたくなるのも頷けた。でも、わたしは彼の怒った顔以外、ほとんど知らないのだ。

いくらかつこ良くて、怒り顔は好きじゃない。わたしが悪いのだけど、強い男はおおらかでない。

資料をプリントアウトしてファイルに挟み、立ち上がったわたしは、柚木に声をかけた。

「移動します」

彼は黙って頷き、おとなしくわたしのあとをついてくる。

入り口と反対側にある実験室と書かれたドアをわたしが開けると、背後の彼が息を呑んだ。

まあ、普通の人は驚くだろう。

ラボの隣にある実験室は、わたしのために作られた特別な部屋だ。

広さはテニスコート約二面分。全体を強化コンクリートが覆い、天井の高さは十メートル以上ある。ちよつとした体育館みたいで、多少の爆発ならなんの問題もない。

実は数年前に当時の実験室を半壊させて、見かねた前社長が作ってくれたのだ。

併設された倉庫には、今まで開発してきた防犯扉や金庫などが保管されている。

わたしたちが実験室に入ると、先に準備をしていたさくらが手を振った。

中央の三メートル四方をアクリル板で囲い、外側にパソコンとつなげたカメラと速度計をセットしてある。

わたしは、さくらから受け取った白衣を羽織り、持っていたゴムで髪の毛を一つにしばった。

ゴーグルとマスクをつけたあと、作業台の上に置かれたアルミのアタッシュケースから小さな部品を取り出す。

「なにが始まるんだ？」

そんな柚木の言葉は無視して、アクリルの箱の中に入った。

部品は直径二センチほどのおはじきによく似たものだ。それを中心に置き、起動装置を取りつける。

「さくらちゃん、カメラの位置確認して」

「はい」

「全体が入るようにしてね」

「はい。アングルOKです」

位置をもう一度確認し、箱の中から出た。

モニターの前にさくらとともに立つと、後ろから柚木が覗き込んでくるのがわかる。その距離の近さに思わずドキッとしてしまう。

「じゃ、じゃ始めるわよ」

「はい」

わたしはキーボードを操作して、起動スイッチを入れた。箱の真ん中の装置をじっと見つめるけれど、なにも起こらない。

「……あれ？ 電流が来てない？」

「うーん、信号も来てませんね」

モニターを見つめて、さくらが言う。

「配線ミスかしら？」

確認しようと箱の入り口に近づき、わたしが扉を少し開けたその時、突然中の装置がポンツと音を立てて起動した。

「きゃっ!？」

「うっ」

軽い衝撃を感じたかと思うと、気づいた時には柚木に抱きしめられていた。その態度は、まるであの箱から守ろうとしてくれているみたいだ。

「あ、ありがとう」

「つつげほっ、がっ……。な、なんだこれはっ」

わたしを抱きしめたまま、彼は咳込んだ。

あたりには箱から溢れ出た白く薄い煙が広がっている。空調が動く音が聞こえた。さくらが換気

ボタンを押したようだ。

強力な換気装置はみるみる煙を吸い込んでいく。

「催涙ガスよ」

わたしが答えると、柚木はこつちを見下ろした。そして今の状況を初めて自覚したみたいに、ガスのせいで赤くなった目を見開く。

抱きしめられているせいで、ものすごく顔が近い。

やはり、なんだかドキドキしてしまう。柚木にときめくなんて、どれだけ自分の私生活には潤いがないんだろう。

「な、なんだって!？」

「正確に言えば、通常の催涙ガスを五倍に薄めて、そこに唐辛子成分を混ぜたものよ」

あなたのその目が赤いのも、喉が痛いのも、そのせいよ、と続けたら怒りそうだったので、そこは言わない。ちなみに、わたしもさくらもゴーグルとマスクをつけていたので無事だ。

柚木は顔を擧め、わたしの体から腕をそっと離れた。

その瞬間、わたしは一瞬だけがっかりしてしまった。その落胆を悟られないように、さくらを振り返る。

「さくらちゃん、データは取れてる？」

「取れますよ！ さっきのはカチョーが起動スイッチを押し間違えたみたいです。今押したら動きましたもん」

「あらやだ。わたしの押し間違え？」

「今まで何度も実験をしてきて、そんな失敗したことないのに……」

「ついでに、柚木さんのかっこいいシーンもばっちりです。もう映画みたい！ カチョー見て見て！」

「弾むようなさくらの声に促され、わたしは移動してモニターを覗き込む。」

装置の起動とともに柚木がわたしの体を抱き込み、自分の背中で庇うところが映っていた。

「まあ……」

確かに、映画やドラマのようだ。

「くそっ、それを今すぐに消してくれ」

上から覗き込んでいた柚木が、苦い顔をして言った。

「残念ですけど、実験データだから消せませーん。保存保存♪」

「くそっ、げほっげほっ」

彼はまた咳込む。怒っていることがありありとわかる。

「効果はありそうだけど、こんなに広がったら、二次災害のほうが酷いわね」

まだ咳をし続ける柚木を見つつ、わたしはさくらに言う。

「そうですね、ターゲットだけにまとわりつかせられれば良いんですけど」

「もっと重たい気体を混ぜればいいのかしら」

取り込んだデータを見ながら、うーんと首をかしげる。

すると、赤い目をこすりながら柚木が尋ねてきた。

「いったいなにを作ってるんだ？」

「個人用の防犯グッズよ。これは超小型の催涙ガス発射装置。ネックレスやボタンにつけて、いざという時に発射！ って感じね」

残りの試作品を見せると、彼は興味深そうな顔になる。

「昨日使っていた投網もそうか？」

「そうよ。あれもまだ試作品だけ」

「おまえは企業向け防犯システム開発のエキスパートだろ？」

「あら、今褒められたんじゃない？」

「そっちはこの前、大きなプロジェクトを終わらせたばかりなのよ。次のアイデアが思いつくまで、個人用の小さな実験を繰り返しているの。こういうのも好きなの、知ってるでしょ？」

わたしがそう言うと、途端に柚木が苦い顔になった。彼が過去に遭遇した事案を思い出しているのが容易にわかる。

「これからしばらく、こんなことにつきあわされるのか……耐えられるのだろうか」

独り言みたいに言った。

「ほぼ毎回切れて怒鳴っているんだから、そもそも耐えてないじゃない、なんて、わたしはちらっと思う。けれど、それを口にしたらもつと怒られるので、黙っておくことにした。」

「まだやるけど、ゴーグルとマスク、つける？」

「当然だ」

予備のゴーグルとマスクを渡すと、柚木はひつたくるように受け取ってさっさと装着する。その後、同じ実験を二十回ほど繰り返し返して、ガスの広がりや速さを計測した。

装置が作動するたびに柚木は身構えるけれど、そのあとは順調で催涙ガスを浴びせることはない。

「やっぱり広がりすぎるのが気になるわ。気体の量と成分をもう少し調整しましょう」

「はい」

時計を見ると、そろそろお昼になろうとしていた。

「お腹空いたわね。今日は出前取っちゃおう？」

「いいですね！ せっかく柚木さんも来たんだから、歓迎会がてら美味しいもの食べましょう」

さくらが楽しそうに頷く。でも柚木に歓迎会というのは、微妙な気持ちだ。

「なにか食べたいものがある？」

ゴーグルを外している柚木に聞くと、彼は軽く首を横に振った。

「いや、いらない」

「あら？ ご飯を食べたらだめなの？」

「午後は安藤と交代することになっている」

「ふーん」

安藤って、もう一人の女性のほうか。

後片づけをしてラボに三人で戻ると、その安藤さんが一人で待っていた。

「柚木さん！」

ホツとしたような顔で、彼女が近寄ってくる。わたしをちらつと見て軽く挨拶したあと、柚木に向き直った。

「どうしたんですか？ その目」

心配そうな顔で、彼の顔に手を伸ばす。

わたしもそつちを見た。

確かに目がまだ少し赤い。さっきの催涙ガスの影響だ。

柚木はその手をすつと避け、大丈夫だとばかりに首を横に振る。そして、その様子をじつと見ていたわたしと目が合うと、お前のせいだと言わんばかりに睨んできた。

もう、まだ怒っているのかしら、わざとじゃないの？ 謝ったじゃない。

……いや、謝らないかもしれない。うん、謝ってはいいわね。

一人悩んでいると、さくらがそつと寄ってくる。

「カチョー。あの人誰ですか？」

「ん？ 安藤さん？ 柚木と同じ警護課の人よ。二人でわたしを護衛してくれるんだって」

「へー。随分わかりやすい……」

さくらは言葉を濁しながら二人を見た。

柚木と安藤さんが向かい合ってなにかを話している。柚木は至って普通に見えるけど、安藤さんが彼を見上げる目は、あきらかにキラキラしていた。

「カチョー、早速ライバル出現ですよっ」

「なに言ってるの？ さ、出前頼みましょ。今日は奮発してうな重にしようかな。さくらちゃんもそうしなさいよ」

「カチョーのおごりですか？」

「もちろん」

「やった！ あ、安藤さんも食べます？ お昼ご飯」

さくらが安藤さんに尋ねると、彼女は首を横に振った。

「いえ、食事は済ませてきました」

「じゃあ、やっぱり柚木さんだけでもどうぞ。カチョーのおごりなんで」

さくらの言葉に柚木は困った顔になったが、わたしだって困る。

「え、柚木のも？ いらないうって言ってるのに？」

「まあまあ、ここはカチョーの良いところ見せないと」

さくらがウシシと笑う。

なにか間違っていないかと思いつつ返事に困っていると、安藤さんがきっぱり断ってきた。

「ボディガードは依頼人と食事をしません」

彼女のわたしを見る目は、やっぱり冷たい。ほぼ初対面のはずだし、嫌われることをした覚えはないのに。

「あら、依頼人は社長であって、カチョーではありませーん」

さくらが言い、安藤さんは今にもブチ切れそうになった。

「いや、本当に結構。こちらにも段取りがある」

柚木がそう言うことで、やっとさくらが引き下がった。

わたしはさっさと机の上にある電話の受話器を取って、うな重を二人前、頼んだ。

「どこに頼んだんだ？」

柚木が尋ねてくる。

「社員食堂よ」

「うちの社食がデリバリーをやってるなんて聞いたことないぞ」

ちよつと驚く彼に、わたしは笑う。

「ふふ、特別にやってもらってるのよ」

「弱みでも握ってるのか？」

「なに言ってるのよ。そんなことあるわけないでしょ。前にね、料理長のお嬢さんに特注の防犯ブザーを作ったあげたの。学校からもらったものが使いづらいうって言ってたから」

「特注って？」

「ブザーを押すと親とうちの警護課に連絡が入り、周囲の防犯カメラがターゲットを捉え^{とら}える。映像で誤作動か実際の事件かがわかるから。あと、設定してある通学路を一定以上外れても連絡が入る。うちのGPSは誤差が小さくて、かなり優秀なの。料理長はお嬢さんが心配で仕方がないのよ」

「普通に良いものじゃないか。もつと変な液体とかが出るのかと思った」

「どういう意味よ」

ギツと睨むと、柚木はふっと笑った。笑うと随分雰囲気が変わる。

不意ながらもドキッとしてしまうのは、まあ、仕方のないことだろう。彼の顔面偏差値の高さは否定できない。

それはともかく、社食のデリバリーは早く、おおよそ十五分でうな重が届けられた。

作業机の上を適当に片づける。

「さ、カチヨー食べましょう！」

さくらがいつものようにさっさと準備し、二人で並んでうな重を食べる。それを柚木と安藤さんに見られる——という奇妙なことになった。

……食べづらい。

いつもと違いすぎる状況を改めて実感する。みんな緊張しているのか、妙な緊張感があった。

「カチヨー、午後はどうします？」

救世主さくらが、その雰囲気をやわらげる明るい声を上げた。

「そうね、催涙ガスの成分見直しはあとにして、先に昨日の投網型銃の調整をしたいわ」

「気になるとこ、ありました？」

「昨日はかなり至近距離で使ったけど、もう少し離れても使える仕様が良いかと思うの」

「確かにあまり近いと危ないですよねえ」

「糸に編み込んだ粘液も強力すぎるから、調整が必要みたい」

そこまで黙って聞いていた柚木が小さく唸った。

「それ、人体実験でやるのか？」

「まあ、それが理想ね。だって対人用の製品なんだから」

「いつもは二人だからほとんどマネキンでやりましたが、幸い今日から人手があるから、やりやすいですねー」

さくらが楽しげに言うと、柚木がまた唸る。そして、隣に立っている安藤さんの肩をポンと叩いた。

「……頑張れよ、安藤」

「え？」

困惑気味な彼女を残し、柚木は一旦席を外した。

うまく逃げたなと思いつつ、食事を終えたわたしは午後の実験の準備を始める。安藤さんを連れて実験室に行くと、彼女は今朝の柚木と同じような反応を見せた。

違うのは、さくらが嬉々として安藤さんを実験台に選んだことだ。柚木のように直接の被害は受けなかったものの、散々怖い思いをさせてしまった。

だから、再びやってきた柚木に彼女が泣きついたのは、まあ当然のことだ。

「柚木さん！ 聞いてください。この人たちおかしすぎます！」

柚木は半泣きの彼女の顔を見て、実験の後片づけをしていたわたしたちのほうにやってきた。

片づけ途中のアクリル板には、網の残骸がへばりついている。さくらはこのアクリル板の後ろに

安藤さんを立たせ、何度も投網銃を撃つたのだ。

ハッキリ言って、そこに人を立たせる必要はまったくなかったのに、さくらはあれこれ理由をつけて安藤さんにそれをさせた。

距離を変え、角度を変え、何度も実験を繰り返し、アクリル板にいくつもの残骸を残す。多分暴力に慣れているであろう警護課の彼女ですら顔を引きつらせたのは、さくらの嬉々とした表情のせいだ。

わたしから見てもちよつと怖かった。

「芳野のマッドサイエンティスト」の名前は、近く彼女に譲ろうと固く決意した瞬間でもある。

「……まあ、怪我はないようで良かったな」

柚木はそう言って、安藤さんの肩をポンと叩く。

「まったく、網のかけら一つ当たってもないのに大袈裟な」

さくらは不満げに口をとがらせた。

さくらちゃん、あなたって人は……

わたしがそう思ったのと同時に、安藤さんがとうとう切れた。

「あんたね！ いい加減にしなさいよ！」

「なにを？ カチョーに張りつく代わりに実験に協力してくれるって、社長から聞いてますー」

「協力って、こういうことじゃないでしょ！」

「そっちこそ、うちのカチョーを誰だと思ってるの？ こんな実験ばっかりしてるに決まってるぞ

しょー！」

さくらちゃん、そのセリフあんまり嬉しくないわ。

バチバチと睨み合うさくらと安藤さんを、わたしと柚木は似たような呆れ顔で見る。

「なかなか面白い助手だな」

いつの間にかわたしの隣に来ていた彼が、小さな声で言った。

「いつもはもう少し静かなんだけど……さくらちゃん、楽しそうだわ。今までわたしと二人きりで、同年代の子たちと会う機会がなかったの……」

安藤さんのほうはともかく、さくらはそれほど安藤さんを嫌がっているようには見えない。

「なんとか折り合いをつけられそうだな」

柚木の言葉に素直に頷くのは癪だったけど、確かにそうかもしれないなかった。四人でワイワイと過ごして、それが意外と楽しかったことに気がつく。

「そうね。どうせなら楽しくやりましょ」

目の前で睨み合っている女子二人を見ながら、自分の発した言葉に自分で頷いた。

「俺たちもな」

呟くように言った柚木の声に、わたしは驚いて振り返った。見上げると、珍しく楽しげな顔でわたしを見ている。

「まあ……そうね」

視線を戻しつつ、自分の心臓が妙に跳ねていることに落ち着かない気分になった。

やだ、もう。どうしたの、わたし？ 柚木にドキドキしちゃうなんて。その鼓動を感じつつ、わたしはこの状況にひたすら戸惑っていた。

3

いつも通りに出社して、地下にあるラボのドアを開けると、わたしのボディガードである二人とさくらがもう来ていた。

「おはよう、皆さん」

わたしは挨拶をしながら中に入る。白衣姿のさくらがにっこりと笑った。

「カチョー、おはようございます！」

そんな彼女とは対照的に、全身黒いスーツで固めた二人組は相変わらずの怖い表情だ。なんだからお芝居みたいだと思った。

「さあ、今日も張り切って実験しましょう」

わたしが持ってきた資料をドンと作業机に置くと、柚木と安藤さんがあからさまにため息をつく。そんなコントのような一団を引き連れ、隣の実験室に向かった。中には今日のための機材がすでに揃っている。

「なにをするんだ？」

柚木が恐る恐るというふうに見かねてきた。

「今日はまず、指輪型スタンガンの実用実験よ」

「ス、スタンガン……!？」

機材チェックをしながらのわたしの答えに、彼は驚きの声を上げる。

「じゃあ、柚木さん、まずはこれを脱いでください」

さくらが柚木のジャケットを脱がそうとした。

「お、おいつ」

「ちよつとー」

柚木と安藤さんの声が重なる。

「まあまあ」

さくらは気にせず、ぐいぐいと柚木のジャケットを脱がし、シャツの上から心電図によく似た機器を装着、さらに脳波計をつけたヘルメットをかぶせた。

「なんだよ、これは!？」

「スタンガン使用時の、心臓と脳への影響を調べるのよ。もし命に関わるようなら、大変でしょ」

そう言い、わたしも同じ機器を自分の体に取りつける。

「どうしてあなたも?」

安藤さんが言った。

「通常のスタンガンと違って、電極が自分に近いのよ。だから、こっちへの反動がどれくらいある

かも調べるの」

「いきなり人体実験は危険すぎるだろ」

柚木がまた声を上げる。

「あら。一応機械でのチェックはしてるし、マネキンでの実験は終わってるわ。でも、実際に使ってみないと、ちゃんとしたことがわからないでしょ？」

「しれっと正論吐くなよ」

「つべこべ言わないの。実験には協力する約束でしょ。さ、さつさと始めるわよ」

柚木を引っ張り、アクリル板の衝立の奥側に立つ。電極コードをさくらがパソコンにつないだ。

スーツにヘルメットという妙な出で立ちなのに、柚木がかっこ良く見えるのはなぜだろうか。

そんな彼を横目にわたしはケースの中から指輪型のスタンガンを取り出し、自分の左手の薬指に嵌めた。

これは一見、少し大きな王冠の装飾がついたシルバーリングだ。王冠の先端から電気が流れるようになってる。スイッチは、指輪の内側についていて、それを指でそっと押すと、スタンガンに早変わりするのだ。

「準備は良い？」

まるで柚木に見せつけるみたいに、指輪を嵌めた左手を上げる。彼が息を呑むのがわかった。

「あ、カチョー！ ちょっと待って。それ、高出力の危ないほうですよ！」

さくらの慌てた声にふと指輪を見ると、確かに面白半分で作った高出力のスタンガンだった。触

れると確実に感電する。

「あら、やだ。間違えちゃったわ」

どうも昨日から、こんなミスが多い。わたしがごまかすように突って通常のスタンガンにつけ替えるのを見て、柚木の顔がますます歪んだ。

「こっちはオッケーです！」

ゴーグルをつけたさくらが言う。

「い、いやだ」

そう言ったのは柚木だ。

「大丈夫よ。さつきのとは違って、出力はごく弱めだから」

そう言いながら彼にじりじりと近づくと、柚木も同じようにじりじりと下がった。

「まったくもう。凄腕のボディガードじゃなかったの？ 観念しなさい」

グッと近づいて柚木の手を取ると、自然と体が近づく。彼の目が少し開いて、驚いたような表情になる。

次の瞬間、さらに距離がなくなった。

自分で力を入れたのかもわからない。引き寄せたのか、引き寄せられたのか、微妙なところ。思わずドキッとしてしまったことをごまかそうと、指輪を彼の肩に押しつける。

「えい！」

わたしの体に衝撃が走った。

「きゃっ」

「うっっ」

二人でほぼ同時に叫び、わたしは反動で、後ろに倒れそうになる。柚木は顔を顰めつつも腕を伸ばして、わたしを自分のほうへ引き寄せた。そのまま、二人で床に倒れ込む。

倒れ込むといっても、わたしの体は柚木にしっかりと抱きしめられていて、痛みはなかった。

なんか、昨日もこんなことあったわね。

そんなことを思い出し、彼の広い胸に顔を埋める。

かつてこんなに頻繁に男性に抱きしめられたことがあっただろうか。恋人がいる時期がなかったわけじゃないけど、正直ものすごく短い期間だ。

……本意ながら、またドキドキしている。

柚木の腕はわたしの体にしっかりと回っていて、守られているという安心感があった。

「大丈夫ですか!？」

さくらと安藤さんが駆け寄ってくる。

柚木の片腕が離れ、そのまま一緒に体を起こした。わたしはさくらが差し出してきた手を取り、柚木に支えられたまま立ち上がる。そして、指輪の内側のスイッチを切った。

火照った体が妙で、ぱつと柚木から離れる。

「だめだわ。こっちにも同じだけ衝撃が来ちゃう。相手に押しつけた時に自分の指に電極が埋もれるから、接触するみたいね」

さくらがモニターを見ながら答えた。

「データで見てもそうですね。カチョーにも同時に電流が流れています。絶縁体をもっと分厚くしますか？」

「でもこれ以上厚くするとデザインが無骨になるわ」

パソコンのモニターを見つつ、わたしは腕を組む。

「いつそメリケンサック型にすればいいじゃないか」

顔を顰めながら柚木が言った。まだ多少、衝撃の影響が残っているのか、肩を手で押さえている。

そんなに痛かったのかしら？ 低周波治療器程度の威力しか出ていないはずなのに……

「……それじゃあ可愛くないでしょ」

心配を振り払うようにわたしがきっぱり答えると、彼はさらに眉間に皺を寄せた。

「なぜスタンガンに可愛らしさを求める？」

「だって女の子用だもの。女子は可愛くないと買わないわ。ね、安藤さんもそう思うでしょ？」

柚木の後ろに立っている彼女に声をかける。

「……そもそも、スタンガンを買おうと思いません」

「今どきの女子は護身グッズを持つべきですよ。なにがあるかわからないんだから」

安藤さんの言葉を受けて、さくらが答えた。途端に安藤さんは眉を上げ、さくらを睨む。当のさくらからはまるで気にしておらず、鼻歌を歌いつつ電極のコードを延ばした。

「デザインをもう一度練り直しましょ。絶縁体の厚みを重視して」

「そうですね。では部品を発注しておきます」

「もう少しデータを取りたいから、場所を変えてやってみるわ。柚木」

振り返って彼を見ると、さらに苦い顔になっていた。

「まだやる気か？」

「まだって、さっきのは一回目よ。少なくとも百回はやらないと」

わたしの答えに、彼の顔が青ざめる。

「刺激が来るのはお互いさまよ。わたしだって同じくらい痛いんだから、分かち合いましょよ」

「……どんな理屈だ」

柚木が眉間にぎゅっと皺を寄せる。でも観念したのか、おとなしくまたわたしの前に立った。

結局その後、数十回の実験を繰り返してデータを取った。終わった頃には柚木はぐったりしていたけれど、低周波治療器に似た効果があったのか、わたしは元気だ。

「ねえ。これ、簡易マッサージ機としても行けるかも。出力の切り替えで、スタンガンにもマッサージ機にもなるって、面白くない？」

「危険すぎるからやめとけ」

せっかくのアイデアは柚木に却下された。

電極を取り外し、後片づけをする。朝からいつも以上に騒がしく仕事をしたせいか、やけにお腹が空いていた。

出前を取るか、外に食へに出るか、どっちにしようと考えていると、安藤さんが柚木に駆け寄り

のが見える。

「柚木さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。問題ない」

彼女は心配そうに、柚木のスーツについた埃を手で払う。実験室内を駆けまわったせいで、彼の黒いスーツは埃まみれだ。

安藤さんは百七十センチを超えるすらりとした長身だからか、柚木と並ぶと、お似合いのカップルに見える。服装もお揃いみたいだし。

そう考えた時、なんだかモヤツとした。

思わず自分の白衣をまじまじと見る。同じように床を駆けまわったので、自分も埃まみれだ。そして、なんだか野暮ったい。

「なんの 차이？ 服装？ スタイル？ 顔？ それとも背の高さかしら？」

わたしの身長は普通くらいだけど、柚木と並ぶとまるで大人と子どものように見える。

今まで、自分を誰かと比べたことなんてなかったのに、急にそんなことを考えてしまう自分が信じられない。

その時、さくらがつかつかと二人に歩み寄っていった。そして、安藤さんの腕をぐつと掴む。

「カチョー。わたし、安藤さんと親睦を深めますので、カチョーも柚木さんどうぞ」

「ちよ、ちよつと、親睦ってなによ!? わたしの仕事はっ」

「まあまあ」

怒っているのか困惑しているのか、喚く安藤さんをさくらが力づくで引つ張り、ドアの向こうへ消える。安藤さんの怒鳴り声がかすかに聞こえた。

この場に残された柚木とわたしは、呆気に取られ、閉まったドアを見つめる。さくらちゃんてば、なんて力持ちなの。あれで親睦が深まるのか、甚だ疑問だわ。

「……で、どうする？」

先に我に返った柚木が言った。

「とりあえず外に出るわ。お腹空いたから」

汚れた白衣を脱ぎ、財布とスマホだけを持って、わたしは柚木と一緒に会社の外に出る。春らしい陽気で気持ちが良い。

「コンビニで買って、公園で食べることにした。今日は良いお天気だし」

「わかった」

会社の目の前にあるコンビニに入り、カゴを持つ。

「さて。なに食べよう」

食品の陳列棚をざっと見渡し、食べたいものをカゴに入れていった。

チョコレートバーとフルーツグミ、おせんべいとメロンパン。最後にペットボトルの紅茶と缶コーヒーを入れたところで、柚木にカゴを掴まれる。

「おい、ちよっと待て。なんだこれは？」

「なんだって、お昼ご飯よ」

「これが昼飯だと？ もつとちゃんと食えよ。野菜をとれ。せめて野菜ジュースを飲め」

「野菜は苦手なのよ。良いじゃない。もう大人なんだから、自分の好きなものだけ食べても」

わたしがそう答えると、柚木が苦い顔になった。呆れ顔ともいえる。

とりあえず、彼を置いて会計を済ませ、歩いて近くの公園に向かった。

ビル群の谷間にあるその公園は意外と広く、犬の散歩で訪れる人や子ども連れが多い。昼時になると屋台や移動販売車が来ることもあって、ここで昼食をとるサラリーマンも大勢いる。

わたしが木陰のベンチに座ると、柚木が目の前に立った。あたりを鋭い視線で見回している。

「ねえ、そこに立たれると邪魔なんだけど……」

「これが仕事だ」

ぶつきらばうな声でそう言う。

なんてやつだ。ここに座って目の前の青々とした芝生を見ながら食べるのが良いのに。

「こんな白昼堂々襲ってくる人なんていないでしょ。人も多いし。柚木も座りなよ」

そう声をかけると、彼は渋々という体でベンチに座る。わざとらしいため息が聞こえたけど、それは無視だ。

コンビニの袋からメロンパンを取り出し、かぶりついた。

「んまこ」

ところが、美味しくいただいているわたしの左手首を、柚木がいきなり掴む。

「おい、ちよっと待て」

「えっ、なによ。びつくりするじゃない」

「お前、指輪をつけっぱなしじゃないか！」

あ、意外と指に馴染なじんでいて、すっかり忘れていた。

「あー、スイッチ切ってるから大丈夫よ」

よくあることなので、大丈夫と手をひらひら振る。柚木がゾツとしたような顔をした。

もう。本当に大丈夫なんだから。

気を取り直してメロンパンにかぶりつき、半分ほど食べたところでコンビニの袋から缶コーヒー

を出す。それを柚木に差し出した。

「はい、わたしのおごり。これくらいなら良いでしょ？」

彼は一瞬驚いた顔をしたあと、それをジッと見てから手に取る。

「どうも」

聞こえるか聞こえないかわからないの声をそう言い、プルトップを開けて一口飲んだ。

よし、これで心置きなくお昼ご飯が食べられるわ。さつきから、自分だけが食べて彼に仕事をさせていることが、気になっていたのだ。

うんうんと頷うなずき、公園の景色を見ながら残りのメロンパンを食べた。紅茶を飲んでチョコレートバーをかじる。

隣の柚木が顔を顰しかめているのが見えるけど、引き続き無視だ。

ただ、だんだん口の中が甘くなってきた。

やっぱり缶コーヒーをあげなければ良かったな。

公園の中を見回すと、離れたところにある自動販売機が目に入る。

あそこが一番近いかな。でも面倒だなあ。

チョコレートバーをかじりつつ、柚木をちらっと見た。

彼の手には飲みかけの缶コーヒー。多分まだ残っているはずだ。

「ねえ」

声をかけると、こつちを向いた。

「わたしもコーヒー飲みたくなってきちゃった。ちよつとちようだい」

「は？ いやだ」

彼はギョツとしたような顔になり、すぐさま言う。

「えー、ちよつとだけで良いの。一口だけ」

そう頼むと、さらに苦い顔になった。

もうちよつとかな？

わたしがジツと見ていると、彼は「はあー」と大きなため息をつく。

「買ってきてやるから待ってる」

そう言って立ち上がり、自動販売機へ向かった。

「やったー！」

声が届かないくらい彼が離れたのを見計らって、ぐつとこぶしを握る。

自動販売機は見た目以上に離れていたらしく、柚木はまだそこに到着していない。その後ろ姿を眺めつつ、残りのチョコレートバーをかじっていると、近くに人の気配を感じた。

いつの間にか、すぐそばに男が立っている。お昼休みのサラリーマンにしては、随分くたびれた格好をしていて、帽子を深くかぶっている。

「こんにちは」

その男が言った。年の頃は五十歳以上と見た。

「はい、こんにちは」

そう答えると、男がふむと頷く。

「桃井志乃さんだね？」

驚いた。わたしの名前を知っているなんて。

「そうですけど、どちらさま？」

「いやあ、名乗るほどの者でもないんですけどね。実はあなたと一緒に仕事をしたいって企業がありまして。まあ、僕は仲介役つてとこですか」

これが、社長の言っていた例のヘッドハンティング？

「わたし、今のところ転職する気はありませんけど」

慎重に答えると、男が笑った。

「先方はかなり良い条件を提示されてましてね」

そう言い、ジャケットの裏から少しよれた封筒を取り出して差し出す。

受け取ったらだめだ、と直感が告げた。

「いえ。どんな条件をつけられても、その気はありません」

きっぱりと断ると、男が片眉を上げた。不敵な笑みを浮かべている。

「では、別の方法を取らざるを得ません」

「別の方法？ 例えば暴力とか拉致とか？」

わたしの言葉に、男がギョツとしたような顔になった。

「まさか！ そんな恐ろしい」

ぶるぶるとわざとらしく震える。

「そういう方法もなくはないですが、もっと別の効果的なやり方を知ってるんですよ」

男がゆっくりと近づいてきた。わたしは思わず立ち上がる。

そっと指輪に手を添え、スタンガンのスイッチを入れた。

しかし男がさらに近づいてきた時、こちらに向かって走ってくる柚木の姿が視界に入る。男もそれに気づいたようだ。

「おや、もう監視役が戻ってきましたね」

彼の視線がそれた瞬間、わたしは腕を伸ばして指輪の先を男に押し当てた。

「えいっ！」

「うわっ」

「きゃあ」

指輪は男の腕に当たった。衝撃で男が腕を振り回し、ベンチの上に置いてあったコンビニ袋が地面に落ちる。その上に男の足が乗り、嫌な音が響いた。

実験で何十回と受けてきた電流だけど、わたしも後ろ向きに倒れそうになる。

あ、やばい。頭を打つかも。

そう思ったところで、柚木に抱きかかえられた。

「桃井、大丈夫か！」

「全然、平気」

後ろから聞こえる彼の声は乱れている。長い腕がわたしの体に回り、がっちり抱きしめられていた。こんな時なのに、違う意味で心臓が躍る。

わたしは彼に抱えられたまま、指輪のスイッチを切った。

「随分手荒いですね。なんにもしてないのに」

痛ててと手と腕をさすりながら、男が言う。

「わたしは防犯のプロなんです。事故を未然に防ぐことは基本です」

セリフはかっこ良かったけど、如何せん柚木に抱きかかえられている状態なので微妙だ。それが面白かったのか、男がケラケラと笑う。

「なかなか手ごたえのある人だ。また来ますよ」

そう言うのと、さっさとその場を離れた。

一瞬、柚木の体が男を追いかけようと動く。けれど、まだわたしを抱えていたため諦めたらしい。

男が見えなくなったところで、ようやく彼の腕の力が弱まる。ゆっくりと体を起こし、わたしを支えて立ち上がらせた。

「なにを考えてるんだ！ なぜすぐに逃げない!? たまにはじつとしてられないのか！」

そしていきなり怒る。逃げるとじつとは反対じゃないのと思っただけは、口ごたえしてみた。

「実地でのグッズの検証なんて、なかなかできないもの。チャンスは逃さない主義なの。だってプロだもん」

「防犯のプロならまず逃げろ！ あの状態なら、それが最適だ!!」

「そんなケンケン怒んないでよ。わたしもそれなりにパニックだったんだから」

「パニックはこつちだ。……離れた俺も悪かったが——」

そう言うって、彼は顔を顰めた。

けれど、遠くにある自動販売機に向かわせたのはわたし自身なので、彼を責める気はまったくない。むしろ怒られるのはわたしだと、納得はしている。

「柚木は悪くないよ。……ごめんなさい。今度からはちゃんと逃げるわ」

しおらしく答えると、柚木は渋々頷いた。

「会社に戻るぞ。社長にも報告しないと」

「そうね。わたしからも説明するわ」

さすがに柚木が責められるのは可哀想だ。わたしにだってそれくらいの良心はある。

わたしは地面に落ちたコンビニ袋を拾った。中身は見なくてもわかるほどべったんだ。仕方な